

世界の博物館

リンネ博物館・資料館・植物園

—世界の至宝収める植物資料館—

藤 則雄

- 1 本学卒業生、教員、非常勤講師等のうち、顕著な評価を得ている作家の作品
- 2 特色あるコレクション
 - A. 今日まで形成されてきた一定の方向を発展させる
 - B. 新たな視点からの形成
- 3 美術・デザイン標本類
- 4 加越能美術品

また購入理由や価格の妥当性を明確にする手順を定め、学外識者の評価を求めることも出来るようにしてあります。さらに毎年、資料収集を自己点検評価の対象としています。

ミュージアムを持つ大学は幾つ也存在しますし、東京芸術大学では大規模な大学美術館を建設していますが、残念ながら金沢美大には、上記の美術品を管理・展示する資料館も美術館も制度としてはまだ存在していません。そのため美術品や工芸技術資料については附属の美術工芸研究所が管理・運営し、書道関係、絵手本・稿本、画稿、版画などの一部は図書館が管理していますが、学内の諸専攻が収集や管理・展示・活用のイニシアティブを取っている部分もあります。学内には、これらの管理・活用を統合して資料館または美術館を求める気運があり、その実現が願われています。

(金沢美術工芸大学附属図書館長
芸術資料整備委員)

博物館（資料館）の有無、質と量、その在り方は、その国の文化水準のバロメーターであり、大学の学問的評価の指標である、とも云われている。

ノーベル賞・福祉・メルヘンの国—スウェーデンの首都ストックホルムから北約100kmに、Upland州の州都・学都・宗教都、人口数万のウプサラUppsalaがある。かつてはこの国の首都でもあった。ここに、世界屈指の古い創設、約550年の伝統を有するウプサラ大学がある。

この大学が世界に誇りうる施設には数々あるが、その中にリンネ博物館・資料館・植物園がある。

リンネ Car von Linné (1707~1778) の名は、自然科学、殊に、自然史学者にとっては忘れえぬ科学者の1人ではある。牧師の子として生まれ、世界に冠たるウプサラ大学で医学・植物学を学び、後年教授として分類学の基礎を確立し、「植物哲学」(1751)・「自然の分類系」(10版は1758)等の名著を刊行。特に後者は生物分類学の宝典であり、世界の至宝とも云われる。生物名が國によって異なることの学問への不便さに即して、学名として二名法(分類単位の属名と種名を併記する命名法)を創設したことにより“分類学の祖”と賞されている。このリンネを記念しての博物館には、資料館・植物園等も附置され、リンネの名著・採集資料も保管されている。のみならず、世界の殆どの植物が保存され、永久保存のために栽培もされ、一般にも公開されている。他に、リンネの教え子や同学の学者の資料も保存され、展示に供されている。

江戸時代末期にオランダ人を名のって長崎出島に渡来したツンベルグ Caroli Petri Thunberg は、江戸への往復で採取した日本の植物に関する名著“Flora Japonica”日本植物誌(1784)と共にその措葉も保存されている。

因みに、ツンベルグが日本の国土・國民・農業・産業・貿易、彼の専門の植物・動物等の紹介をした功績は大である。日本の本草学者は彼に植物葉体や種子を贈り、彼は医学や植物の書物を与えた。特に、桂川甫周と中川淳庵に外科手術を教え、両人は日本の薬草を



C.von Linné
・リンネ博物館(資料館)・リンネ立像・リンネ家の写真

CAROLI PETRI THUNBERG
 MED. DOCT. PROF. REG. ET EXTRAORD. ACADEM.
 CAES. N. G. REG. SCIENT. HOLMENS. SOCIET. LITTER.
 VPSAL. PATRIOT. HOLMENS. BEROLIN. N. SCRVT.
 LVNDIN. HARLEMENS. AMSTELDAM. NIDRO-
 SIENS. MEMBRI

F L O R A
 I A P O N I C A
 SISTENS
 P L A N T A S
 INSVLARVM IAPONICARVM
 SECVNDVM
 SYSTEMA SEXVALE EMENDATVM
 REDACTAS
 AD
 XX CLASSES, ORDINES, GENERA
 ET SPECIES
 CVM
 DIFFERENTIIS SPECIFICIS, SYNONYMIS PAUCIS,
 DESCRIPTIONIBVS CONCINNIS ET
 XXXIX ICONIBVS ADIECTIS.

L I P S I A E
 IN BIBLIOPOLIO I. G. MÜLLERIANO
 1 7 8 4



C.P.Thunberg

ツンベルグの名著「日本植物誌」(1784,初版本)の表紙

与え、日本の科学の実態を教えた。ツンベルグは、この二人の優秀な能力に驚嘆した。この二人は、後に杉田玄白等と「解体新書」の翻訳刊行に参画した。ツンベルグの「日本植物誌」は、ドイツの日本研究者のシーボルトによって、コピーの1冊が伊藤圭介に贈られ、伊藤はこれにリンネの「植物分類表」を付して、1828年「泰西本草名疏」を刊行した。なお、伊藤は、後年東京帝大教授となり、日本最初の理学博士となった。若き同僚の1人に牧野富太郎があった。

ともあれ、事ほど左様に、記せば尽きぬ数多くの世界の至宝の資料が大切に保管され、これ等の珍宝がすべての人々に差別なく情報公開され、研究・教育の発展と科学の普及のために供されている。

スウェーデンの名城—ウプサラ城を眺む伝統あるウプサラ大学キャンパスの一角に、アテネのパルテノン神殿に模して建てられている博物館・資料館、そして、附属植物園は、まさに世界の至宝である。

金沢大学資料館の在るべき姿の一例ではある。金沢大学資料館の更なる充実と発展とを大いに期待したい。

(金沢大学名誉教授・金沢経済大学教授)

文化財の保存と修復 ヨーロッパの修復事情

川口 法男

私達の海外修復施設視察の第一歩はロンドンから始まった。ヒースロー空港のロビーには京都時代の同僚フィリップ・メレディス氏の懐かしい顔があった。彼は京都での長い修行期間を経て、数年前からオランダのライデン国立民族学博物館で東洋美術部修復センターの所長をしているのだが、わざわざここまで足を運んで出迎えてくれたのである。

空港を出てバスに乗り込んだのは午後4時半頃だったが、2月のロンドン郊外はすでに夜の闇に包まれていた。ホテルに荷物を置いて軽い夕食をとるために街にでる。オレンジ色の街灯がとても印象深かった。そのやわらかい光の中では人の歩みも非常にゆっくりしたもの感じられた。その日は長旅の疲れのせいか深い眠りにおちた。

翌朝、フィリップ・メレディス氏に案内してもらい最初の視察先であるThe British Library (大英図書館)を訪れる。この図書館は大英博物館にその基礎を置いている。大英博物館開設の百年後、すなわち1853年に同館内に図書館が設けられたが余りにもその規模が増大したため、1973年に英国初の国立図書館として独立した。日本美術の収蔵品の大半は姉妹館であり母体でもある大英博物館が所蔵しているが、大英図書館にもフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが日本からもち帰った写本・版本・地図などが3000冊以上、その他に住吉如慶筆の「源氏物語画帖」や桃山時代に描かれた「伊勢物語図会」「百合若大臣絵巻」といった名品が所蔵されている。

大英図書館の修復室内部は私達の目にはとてつもなく広く感じられた。実際5人ほどのスタッフが充分すぎるほどの広さの中で修復作業をおこなっていた。主任のマーク・バーナード氏は人なつっこそうな笑顔で私達を案内してくれた。このスタッフに混じって日本人女性の松岡久美子さんが保存科学者然とした姿で立ち働いていた事は、彼女の情報を知らなかった私達には意外であり、頼もしくもあった。ここで見せてもら



大英図書館修復室